

遊び空間としての児童公園について —金沢市「詩の木公園」で観察される児童の遊び—

スポーツ科学課程 98-246 山崎雄太

1. 研究の動機・目的

子どもが「遊ばない」「遊べない」といわれるようになって久しい。たしかに最近、近くの公園や空き地で遊んでいる子どもの姿をみることがあまりない。学校から帰ってきた子どもたちは、どこで何をしているのだろうか。外で遊ぶことが大好きだった私は、現在の子どもたちにも遊びを通して様々な体験をし、良い思い出を作ってもらいたいと思いこのような研究を始めることにした。

子どもが遊ばなくなった理由として「時間・空間・仲間」という三要素の変容が指摘されている¹⁾。そこで、本研究では特に遊び空間としての児童公園に着目した。子どもの遊び場が減少しているといわれるなか、逆に増加しているのが児童公園である。しかし、せっかくなつくられた公園であっても、子どもにとって魅力がなくなだれも遊ばないというのであれば、無駄な努力になってしまう。子どもたちはどのような遊び空間を求めているのだろうか。子どもたちの声を取り入れた公園の増加こそ、意味があるのではないだろうか。

そこで、本研究では、実際「詩の木公園」を訪れた児童の遊びを仲間・空間・時間の三つの視点から分析し、「詩の木公園」における児童の遊びの実態を把握し、児童がどのような遊び空間を求めているのか検討するための基礎的資料として、「詩の木公園」の遊び空間としての魅力を探ることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 調査の場所 金沢市太陽が丘「詩の木公園」（金沢市太陽が丘2丁目213）

「詩の木公園」は、金沢市中心部から東南6kmに位置し、周囲を住宅に囲まれ、昼間車の往来がほとんどない。観察の対象は公園敷地内及び、公園北側にある住宅建設予定地の草むらとした。

(2) 調査期間

平成13年10月2日から11月22日にかけて20回調査を行った。

(3) 調査対象

調査期間に「詩の木公園」を訪れた児童を対象とした。また、児童の遊びに関与した幼児・大人も調査の対象とし、それ以外の利用者は対象としなかった。

(4) 調査方法

午後3時00分から午後5時30分まで「詩の木公園」を訪れた児童の集団、遊んでいる場所、遊びの内容を時間経過と共に書きとっていった。筆者は観察に徹し児童の遊びには関わらなかった。

3. 金沢市太陽が丘「詩の木公園」の概要

金沢市太陽が丘「詩の木公園」は、太陽が丘ニュータウン事業の一環として、太陽企画社によって住宅地の子どもたちの遊び場の目的で造られた。平成5年5月に完成し、太陽企画社によって管理されてきた。その後平成10年4月から金沢市が管理をおこなっている。敷地面積は8553.10(m²)で、芝生の広場とブランコ、すべり台、ネット、階段が一体となった複合遊具が置かれている。周囲を住宅に囲まれており、公園に接する道路は、昼間車の往来がほとんどみられない。

【表1】来園者の内訳

4. 結果及び考察

(1) 来園者の属性

調査を行った20日間で344人が「詩の木公園」を訪れた

性別	幼児	低学年	高学年	大人	合計
男子	40	78	52	3	173
女子	24	63	38	46	171

【表1】。この内訳をみると、7割近くが小学生であり、「詩の木公園」は小学生の遊び場としての役割が大きいと考えられる。さらに、幼児を連れた母親の姿も多く見ることができた。遊具のまわりで母親同士がおしゃべりしながら子どもを眺めていることが多かった。

調査期間内に「詩の木公園」を訪れた児童の集団の規模は、2人が45.6%、3人21.6%、1人18.5%というように、全体の9割近くが3人以下という小さな集団であった。太陽が丘の小学生に対しておこなった「子どもの遊びについての調査」で、児童の学校が終わった後の予定についてたずねた結果をみると、平日3割近くの児童が予定を持っていた。このように、仲良しグループの中の何人かは塾やおけいごとと一緒に遊ぶことができず、2,3人という小さな集団しか形成できないのではないかと考えられる。また、集団の構成をみると、同性で同年齢の友達だけで来園した児童が89.6%であり、異性や異年齢の友達と来園した児童は10.4%であった。

(2) 「詩の木公園」での遊び

児童の遊んでいる場所を、遊具、広場、木のまわり、草むら、公園内の道路、遊具のまわり、ベンチの7つに分けてみると、最も多かったのが遊具の48.9%、次いで広場が40.7%であった。このように、「詩の木公園」を訪れた児童のほとんどが、遊具か広場で遊んでおり、これ以外の場所は児童の遊び場としてあまり利用されていなかった。また、これをグループ別にみると、低学年の女子は遊具で遊んだ児童が6割いたのに対し、広場で遊んだ児童は2割であった。逆に高学年男子は遊具で遊んだ児童が4割であるのに対し、広場で遊んだ児童が7割であった。このように、性別や学年で遊ぶ場所に違いがみられた。

次に児童が「詩の木公園」でどのような遊びをしたのかみると、最も多かったのが「遊具で遊ぶ」の79人、次いで「ブランコ」の70人、「サッカー」の58人であった。その他「自転車」「おしゃべり」「木の実ひろい」「犬と遊ぶ」「野球」「たたかいごっこ」「かくれおに」といった遊びが比較的多く観察された。学年別にみると、低学年の児童は複合遊具での遊びがよく観察され、広場での遊びも「たたかいごっこ」や「犬と遊ぶ」といったものが多かった。高学年の児童は男子と女子でも遊びの内容に差がみられた。男子は広場で「サッカー」や「野球」「キックベース」等のスポーツを好んでいるのに対し、女子では複合遊具での遊びが好まれていることがわかった。加藤氏²⁾は「遊びの内容は、子どもの成長により変化する。低学年と高学年遊び方も違う。体力差が歴然としている場合、この両者が同じ空間を同じ時間に利用するのは難しい」と述べているように、「詩の木公園」でも低学年と高学年の遊び内容の違いが観察され、これに伴い遊ぶ場所の違いもみられた。

(3) 遊び集団

来園時の集団については先に述べたが、観察するなかでこれらの集団が結びつき、来園時より大きな集団となり遊ぶ姿を見ることができた。そこでここでは、公園を訪れた児童が公園内で最終的にどのような集団で遊んだのか考察する。

公園内での遊び集団の規模は、2人の30%が最も多く、次いで3人の17%であるように3人以下で遊んでいた児童が5割以上おり、小さな集団で遊ぶ傾向がみられた。しかし、来園時では9割近くが3人以下であり、4割の集団は他の集団と一緒に来園時より大きな集団で遊んでいることがわかる。また、5人以上の集団は来園時1割にも満たなかったのに対し、5人10%、6人8%、7人7%、8人15%と増加しており、比較的大きな集団で遊んでいる姿も観察された。また、学年別にみると、低学年で最も多かったのが来園時と同じ2人の39.7%であり、他の集団と一緒に遊ぶ姿はあまり観察されなかった。高学年で最も多かったのが8人の25.6%であり、次いで7人の17.7%と来園時と比べ大きな集団で遊んでいる姿がよく観察された。高学年の児童は男子と女子と一緒に来園することはほとんどないが、公園内で男子と女子と一緒に遊ぶ姿はよく観察された。これは高学年の児童の遊びがサッカーのように多くの人数を必要とするものが多く、後から来ても仲間に入りやすいのに比べ、低学年の児童のほとんどが遊具での遊びや木の実ひろい等、小人数です

る遊びが多いからではないかと考えられる。

深谷氏³⁾は、「最近、アポイントをとっておかないと遊びが成立しなくなった。その結果、原っぱや町角に行くと必ずだれかがいて、遊びが始まるといった、かつての子どもをめぐる風景はみられなくなってしまっている。」と述べている。しかし、「詩の木公園」では、アポイントがなくても公園にいる他の児童と遊びが始まるという姿を観察することができた。特に高学年の児童は、公園に来てから、集団の人数が増えて行き、遊びも発達していく姿を何回か観察することができた。神保氏⁴⁾も「そこに行けば友がいる、そこに行けば何かが始まるというたまり場的要素を重視すべきである」と述べているように、「詩の木公園」が太陽が丘の児童のたまり場としての役割を果たすことができれば、自然に児童の遊び集団も大きくなっていくのではないだろうか。

また遊び集団の構成をみると、同性・同年齢だけの集団で遊んでいた児童は 70.9%、異性・異年齢集団で遊んでいた児童は 29.1%であり、来園時と比べると、異性や異年齢の友達と一緒に遊んだ児童が多くなったことがわかる。この結果を学年別にみると、低学年は同性・同年齢集団が 81.6%、異性・異年齢集団 18.4%と来園時と比べ大きな違いはみられなかったが、高学年は、同性・同年齢集団 54.4%、異性・異年齢集団 45.6%であり、5割近くの児童が異性や異年齢の友達と遊んでいることがわかった。このように高学年の男子と女子と一緒に遊ぶ姿はよくみることができたが、低学年と高学年の児童と一緒に遊ぶ姿はあまり観察されなかった。大村氏⁵⁾は「かつて、さまざまな年齢の子どもと一緒に遊ぶことによって生まれていた遊びの伝承や広がりや失われている」と述べているように、「詩の木公園」においても異年齢集団での遊びは失われているのだろうか。先にも述べたように低学年と高学年ではよくする遊びも違い、たとえ一緒に遊んでも体力の違いでお互いおもしろくないのではないだろうか。実際「詩の木公園」でも低学年の児童と高学年の児童と一緒にサッカーをする姿を観察できたが、お互いすぐに飽きて止めてしまった。しかし、異年齢の遊び集団がまったく見られなかったわけではない。低学年と高学年の児童と一緒にサッカーやおにごっこ等を楽しそうにする姿や、低学年の児童を気遣いながら遊ぶ高学年の児童の姿を観察することもできた。このように、ルールを変えたりする工夫や気遣いがあれば異年齢の集団は成立するのではないだろうか。児童にとって異年齢集団での遊びは多くの人が指摘しているように重要な意味を持っている。公園等の遊び場を造るだけではなく、学校、地域等で異年齢の児童と一緒に遊ぶことができる機会を作っていく必要もあると考えられる。

(4) 時間からみた分析

児童は、15時30分から16時30分までの1時間に全体の6割以上が来園しており、16時30分を過ぎると来園する児童は徐々に少なくなっていった。低学年に比べ高学年は平均で30分程度遅く、学校からの帰宅時間の差がそのまま来園時間の差になっていると考えられる。

また、児童の公園滞在時間は、30分以内の児童が56.7%と5割以上であり、1時間以上公園で遊んでいた児童は全体の16.5%しかいなかった。平均時間は34.7分であり、けして長い時間であるということとはできない。公園滞在時間は男子より女子、低学年より高学年のほうが長い傾向があることがわかった。高学年の児童は、来園時間が30分程度遅いのにも関わらず、滞在時間は長かった。この理由として、遊び内容や遊び集団の規模等が考えられる。

帰宅時間をみると、17時15分までに9割以上が帰宅しており、17時以降は暗くなり遊ぶことができなくなってしまうのではないかと考えられる。また、「詩の木公園」には時計がなく、17時のチャイムを合図に帰宅しているのではないかと考えられる。

(5) 遊びの特徴と分析

「詩の木公園」を訪れた児童の多くが、遊具から遊びを開始する。始めから、サッカーや野球をするといった目的を持って来園する児童を除くと、ほとんどの児童が、公園に入ってくるとそのまま遊具まで走っていき、ブランコやすべり台で遊び始めた。そのため、来園した時、他の児童が遊

具で遊んでいると、そのまま帰ってしまう児童も何人かいた。

遊具での遊び内容をみると、本来考えられる遊び方とは違った方法で遊ぶ児童の姿を多くみることができた。すべり台を逆から走って登る遊びは、一見簡単に見えるが、つるつる滑る斜面を速く登るのは、なかなか難しく、児童の挑戦意欲をかきたてるようである。他には、ブランコでの遊びがある。ブランコをつるしている3本の鎖を何回もおねじることによりブランコはぐるぐるまわり始める。児童はこの回る速さを競っていた。さらに、「詩の木公園」の地形や設備を利用した遊びも多く見られた。広場の東側はゆるやかな坂になっており、この上をサッカーゴールにすることによって、ゴールを決めるのが困難になる。弱いチームのゴールを坂の上にするにより、点差が開くことがなく、より白熱した試合になっていた。

このように、「詩の木公園」における児童の遊びを観察することにより、遊びの発展や意外性をみることができた。しかし、これらの遊びの中には、1歩間違えると、事故やケガにつながるものもみられた。安全管理の面から考えると、遊具の破損やメンテナンス不良など、児童が予測できない危険「ハザード」と、児童が危険をひと目で予測でき、その児童自身が回避できる危険「リスク」を見分け、管理していく必要があると考えられる。

5. 結論

- ①「詩の木公園」を訪れた児童の集団は、全体の9割近くが3人以下という小さな集団であり、その構成も9割近くが同性で同年齢の友達のみであることが明らかになった。
- ②「詩の木公園」を訪れた児童のほとんどが、遊具か広場で遊んでおり、これ以外の場所は遊び場としてあまり利用されていないことがわかった。また、低学年の児童がブランコ、すべり台といった遊具での遊び、高学年の児童はサッカー、野球と広場での遊びというように、遊び内容の違いが観察され、これに伴い遊び空間の違いもみられた。
- ③「詩の木公園」における児童の遊び集団の変化をみると、4割近くの児童は、来園時と比べ大きな集団で遊んでいることがわかった。また、集団の構成は、低学年と高学年の児童が一緒に遊ぶ姿はあまり観察されなかったが、高学年の男子と女子と一緒に遊ぶ姿は多く見られた。このように、わずかではあるが「詩の木公園」を訪れた児童の集団は広がりを見せており、失われているとされる、児童の「群れ型の遊び」を回復する役割を果たしていると考えられる。
- ④児童の滞在時間は決して長い時間であるということとはできず、長い時間遊んでいても児童が飽きないような工夫が必要である。
- ⑤「詩の木公園」における児童の遊びを観察することにより、遊びの発展や意外性をみることができ、「詩の木公園」が児童の遊びの創造性を引き出す役割を果たしているといえる。しかし、遊具が少ないや水道が汚いといった問題点もあり、少しでも児童の要望に近づく努力が必要である。

引用・参考文献

- 1) 笠間浩幸・加藤由希子：釧路市西港臨海公園にみられる子どもの遊びと親の意義（1998）
「釧路論集」第30号 P137～157
- 2) 加藤慶子：子供の遊び場に関する調査研究—手稲前田地区の児童公園を通して—（1991）
「北海道工業大学研究紀要」第19号 P1～8
- 3) 深谷昌志：『放課後の子どもたち』（1987）灯台ブックス
- 4) 神保信一・深沢紀子：子どもの遊び場についての研究（2）（1976）
「明治学院論叢」237号 一般教養科目特集 P25～42
- 5) 遊びの価値と安全を考える会編：『もっと自由な遊び場を』 大月書店